

新新映画

シネスコ版

39.7.10

No. 547

高新 = 2 No 382

新新映画 = 2 No 210

特集

一、黄色い血の恐怖

血は赤いにきまっている。しかし売血常習者の血は黄色を帯びている。

「危険な黄色い血は、なんとしても追放しなければならぬ。」という悲願、いまや国民世論にまで高まってきている。この汚れた血は、肝臓ビールスを持ち、輸血による血清肝炎（せつせいけんえん）を統発せしめ、血液を必要とする人々に不安と恐怖を与えている。

医学の進歩は不治の病気を治し、日本人の寿命を大幅にのばしたが、そのために必要な保存血液は売血制度によってまかなわれてきた。現在の売血制度は完全な設備をもつ業者が厚生省の許可を得て行うことになっており、その限りでは問題はない。だが血液の需要増加に反し、売り手の方は限られているから、無理をしなければ必要なだけの血液は集まらない。

売り手の方にも売れるだけ売るという無理が生ずる。人間の血が商品となりそこに悪循環が生れた。

そして……白衣（せいかい）も着ないで血液を扱う事態が法律のもとで堂々と行なわれるようになってた。

保存血液の中には、汚れた血液があることは事実だ。だが生きるか、死ぬかの切迫した状態では血の汚れも二の次になる。輸血によって一命はとりとめたが、肝炎にかかったという人達は近頃の病院ではざらにいる。

そうした気毒な人達は、どこへ苦しみを訴えればいいのか。

こうした中で、きれいな血を用意し、汚れた血から身を守ろうと、自分達の血を預金自衛に起ち上った町もある。厚生省でも、ようやく売血制度を問題にとりあげ、オープン採血への検討をはじめたとはいえあまりにもおそすぎたのである。

626 Feet

製作 (配給) 中 部 日 本 新 聞 東 京 中 日 新 聞
北 陸 中 日 新 聞 中 部 日 本 映 画 社